

金田光世歌集

『遠浅の空』

(青磁社)

抽象化された詩世界の美しさの際立つ第一歌集。

今日でもない昨日でもない真夜中の隙間に隠れ雨音を聞く

名前のつかない場所において、その隠れ家のようなところから世界にアクセスするのは、この歌集全体に通じている世界観のように思う。

うまれたてのやうな軽さの服を買ふあたたまりはじめる東京に

こんなにずっとずっと死がありしらすほし白飯にのせ黙々と食ふ

比喩と視点が鮮やかで独自性がある。まるで自分の生命と地続きのような服としらすほしが印象的だ。

作者のプロフィールはあまり明かされない。その中でなまの声を聞いたように感じたのが、後半の挽歌の一連だ。

花なんか入れやがつてと言つてほしい棺なんて狭いところから出て

惣菜のほひのなかを歩きゆくあなたのぬない夕暮れである

故人と作者の関係はわからないが、故人の人柄とその人に対する作者の思い、喪失がストレートに伝わる。

これまで言葉にされなかつた世界の隙間に新しい光が当てられたような一冊だ。(斎藤美衣)

丸地卓也歌集

『フィルム』

(角川書店)

第一歌集。医療ソーシャルワーカーという職に従事している作者の二〇一七年から二〇二三年の夏ごろまでの歌が概ね編年体で構成されている。

手のひらに蟻を歩かせ生命線途切れるあたりで吹き飛ばしたり

手のひらの端から中央に向かって蟻が歩くゆったりとした時間の描写が美しい。しかし、息というひとつの行為によって蟻は吹き飛ばされてしまう。蟻、ひいては主体の生活に存在するが可視化できない死の可能性を仄めかしている。

糸のなき風が青さに飲まれゆくかくなる終わりにあこがれており

人間はいずれ死ぬが、死ぬまでは生きている。生きている間は生活があり、主体は現在・未来の不透明な生活に対する諦念を抱えながら死の誘惑に抗おうとしている。

闇を裂き闇の向こうに行けるなら自死のおととに会えるかどうか

弟の挽歌を毎年つくるべしわが黒き森の枯れないうち

歌にあるように、主体の弟は亡くなられている。弟と再会したいと揺らぐ気持ちも、この生活を、人生を歌人として全うするという覚悟も率直に歌われている。(松下誠一)